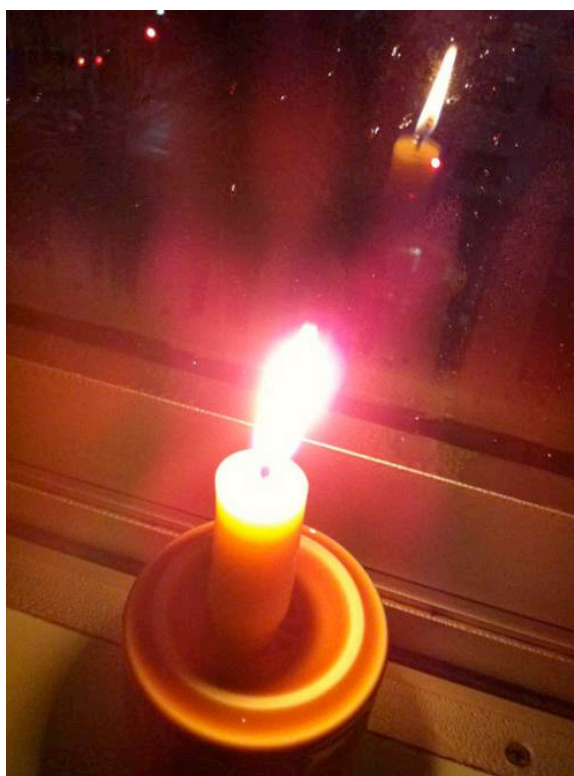


朝日連峰 大朝日岳山麓

ハチ蜜の森から

No.34



Christmas Eve / candlelink3.11

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルはその森の入口にあります。

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎・FAX 0237-67-3260

メール mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページ www.mitsurou.com/

発行日 2012年5月16日

未来

「電動丸ノコお貸ししますよ」

「いや、いらainんです」

まだお手製のドームハウスを工房にしていた13年前のこと。隣町に移り住んできたという私より少し年上の男女が、蜜ろうを求めにいらして下さった。興味があっていろいろ尋ねてみると、男性は小林さん、女性は高橋さん。一緒に住んでいるけれど夫婦ではなく、羊を飼ってセーターを作るために山形に来たという。そして2年が経ち、素人ながらも家を自分で建てているとのこと。夫婦でない事も、羊を飼うというのも驚きだったが、さらに家を建てているというのは衝撃的だった。なにしろ私はドームハウス作りで大変な思いをしている。

さらに驚いたのは、電動丸ノコ（ノコギリ）を使っていないというのだ。もしかして買う余裕がないのかと、使わなくなった私のものを貸そうとしたのだが、使わないことにこだわっていると言うのである。これには少々あきれてしまった。使わないで家を建てるなんて有り得ない。都会人の極端な田舎暮らしへの憧れなのだろうと、失礼だが少々いぶかしく思ってしまった。

ところが1年後。またいらして下さった時に聞いてみると、無事ででき上がって住んでいるというのだ。いぶかしさは敬服の念に変わった。そして、お二人の自給自足な暮らしぶりの話で盛り上がった。

やがて、手書きのハガキでセーター展のお知らせも届くようになった。建物もセーターも興味があるし、年に一度は蜜ろうを買って下さるお客様である。案内が届くたびに「行かなければ」と思うのだが、忙しい春と秋の開催なのと、高価なセーターを買えずただの冷やかashiでは申し訳ないと、たった20分程の距離に足が向かずにいた。そして、そのまま13年も経ってしまっていた。

今年は春一番にいらして下さった。たまたま私の友人も居合わせ、また自給自足の話で盛り上がった。そして、友人がどうしても行ってみたいというので、「それならば」と、ついに訪ねてみるようになった。

二週間後。集落の入口で小林さんが待っていて下さった。軽トラックの後をつけて走ると、まもなく広く開けた雪の大地に小さな建物が見えてきた。入口で高橋さんが笑顔で迎えて下さった。私は頭を掻きかき「はじめまして」と、長年の時間の経過を詫びた。

9坪の小さな建物。居間・寝室・作業場を兼ねた屋内の生活空間は12畳一部屋である。二人暮らしとはいえ随分狭く感じた。ただ、なかなか洒落た作りで、木組みもされており想像以上にしっかりした構造になっている。

ガリガリ、グルグルとコーヒー豆を挽いて下さる小林さん。パンやケーキを切って下さる高橋さん。目を丸くして部屋の中を眺めている私達に、様々な工夫が為されていることをお話下さった。

明かりを効率よく取るための高い位置の窓。屋根は断熱を考えた二重構造。北側の冷たい壁も断熱を考え全面的に柵収納に。寝床は暖かさが残る中二階。調理もできる薪ストーブ。四方の柱の高い位置には蜜ろうそくを置く台もある。外には、移動組み立て式で大地の肥やしにするトイレ。陶芸のアトリエを兼ねた小さな小屋と、羊小屋と鶏小屋。雪の下には小麦や野菜の畑があるという。

30分ほど経ち、布フィルターで濾されたコーヒーは持ち手のない清楚な器に入れられ、やっと私達の前に置かれた。口に含むと、濃いのにきつくなく、まろやかで美味しかった。見ると赤みがかかった美しい褐色をしていて、なんとなくとろみもあるようにも見えた。もったいなくて少しずついただいた。

畑で収穫した小麦と天然酵母で作ったというパンも、香り高く、ずっしりと食べた感じのする美味しいものだった。密閉容器で大切に保存している酵母も見せていただいた。不思議なことに、その時の精神状態が酵母にも

表れるとのこと。味噌も作るし、薪ストーブの脇ではどぶろくも発酵中だった。

もちろん足りない食材は買うとのことだったが、毎日草取りした畑で穫れる季節の野菜や、餌にイナゴも捕まえて与えるという鶏の卵は、ずいぶん食生活を支えているとのこと。さらに大切な水も毎朝汲んでくる湧き水。調理道具は電子レンジもオーブンも使わない。パンすらも鍋で焼く。

衣服は、長く着られる丈夫な綿のものを主にし、リフォームして最後まで着る。収納もわずかで済む。

テレビはなくラジオを聞く。面白くない時は、短波放送で外国の番組をBGMがわりに聞き、語学力を高めるといふ。

最も驚いたことが二つ。この二人はめったに病気をしない。農薬や添加物のない安全な食べ物と発酵食を多く摂っていること、身体を使うことの賜物ではないだろうか。そしてもう一つの驚きは、昨年の大地震の時に、なにも生活は変わらなかったというのだ。納得だった。

長く使えるものを使い、作れるものは作り、穫れるものは穫る。そんな二人の生活費は月に5万円程。電気代は15A契約でたった1000円程。それで冷蔵庫も使えるという。

気になる収入について教えて下さった。小林さんがニュージーランドで学んだ羊の飼いや毛刈りの技により産み出された羊毛は、デザイナーをしていた高橋さんがつむぎ、セーターを手編みする。手織り機で敷物も織る。展示販売は、毎年仕事場で2回、関東で2年に一度。総売上はそんなに多くはない。しかし、生活費も経費もわずかなので、一昨年はヨーロッパ旅行を楽しんできたとのこと。ため息が出た。

翌朝。おみやげにいただいた小ぶりで殻の堅い鶏の卵を、ご飯にかけて食べてみた。家族一同感嘆の声。濃厚で美味しかった。なんだか、とどめを刺された気持ちになった。

祖父母を思い出した。

炭焼き、山菜、きのこ、うさぎ・山鳥、ヤマメ、はげご、かんじき、剥製、養蜂、チャボ、山羊、薬草、山水、薪ストーブ、自作の家…。

一時だったが、私も孫としてそんな生活に参加していた。祖父母の知恵や技は、今でも私の誇りではあるが「遅れた生活」と思っていたことは否めない。だが、あの二人の似ている生活ぶりを見て、憧れる気持ちが湧いてきたように感じている。遅れた生活に戻りたいのではない。あの二人の生活は、あきらかに進んでいるのだ。

とはいえ、どっぷり経済に踊らされた価値観とお金のかかる子育ての最中である。お金と時間に追われる今の生活から抜け出し、あの二人を真似するのは容易なことではないだろう。

だが、今の生活をクールに見つめ、電気や灯油をはじめ無駄な消費を1割でも2割でも減らすことはできそう。さらに、畑の収穫を増やし森の恵みも得て、いくらかでも自給力をつける。その安心感と手づくりのものに囲まれた幸福感に浸りながら暮らすことはできるのではないか。せつかく田舎に住んでいるのだから。

とりかえしのつかない原発事故。治まらない地震。地球温暖化。未来を見つめ今をどう生きるかを思う時、いつも暗い雲に覆われる気持ちになっていたが、ほんのちょっと青空が見えたような気がした。



WOOL SHED ウール・シェッド

小林寿彦・高橋陽子 仕事場展 5月(今年は6月)・10月、土曜日午後 OPEN(6~10月)、山形県西置賜郡白鷹町山口 4662-4 (問※土曜日のみ) ☎0238-85-6113

NEWS (2011.2~2012.4)

キャンドルリンク 3.11

双子キャンドルプロジェクト

二本の棒のついたソーダ味のアイスキャンディーをパキッと割って、誰かと食べあったような取り組みにしたい…。

16年前の阪神淡路大震災の折にも取り組んだ、被災地の子供達に贈るクリスマス「双子キャンドルプロジェクト」を東日本大震災被災地へ向け、実行委員会の仲間達と取り組む事ができました。

大切な人と過ごす華やかなクリスマスは、被災した子供達にとっては、逆に寂しい日かも知れません。山形はもとより全国に呼びかけてキャンドルを作っていました。一本の灯芯の両端をろうに浸しては乾かす事を繰り返すとヌンチャクのような双子キャンドルを作ることができます。一本は作った人もクリスマスイブに灯します。一人一対を基本に心をこめて作りました。

おかげ様で、全国で3000人以上の方が作って下さり、3297本のキャンドルを要望のあったご家族へ贈ることができました。

多くの皆様に、ご参加、ご協力、ご協賛をいただきました。心から御礼申し上げます。

<http://samidare.jp/candlelink/>



公式イラスト/内澤旬子さん

被災地各地で蜜ロウソク作り

ありがたいことに、山形県山辺町の遠藤養蜂場の遠藤貞三様から、精製するのが大変で何年分も貯めていたという蜜巣を無料で大量にいただきました。

これを商売に使っては申し訳ないと、時々仲間と被災地を訪ね、蜜ロウソク作りを楽し

んでもらっています。これまで、岩手、宮城、福島、福島の7市町10カ所をまわることができました。やはり双子キャンドルを作ってもらい、一本は誰かにプレゼントできるようにしました。3.11に灯して下さった方も多くいらしたようです。遠藤養蜂場さんには心から御礼申し上げます。また、実施にあたっては会場手配や宣伝など、毎回現地の皆様に大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

まだ残っているので、なくなるまでまわろうと思っています！

<http://samidare.jp/candle311/>



3.11 チャリティーキャンドル

東京銀座ミツバチプロジェクト+銀座松屋+ハチ蜜の森キャンドル。昨年に引き続き、松屋のクリスマスケーキ販売とあわせて、銀座のミツバチから採れた蜜ろうを使ってチャリティー用の蜜ロウソクを協賛製造いたしました。ハチ蜜の森キャンドルの倍の価格で販売されたカヌレ形キャンドル100個分の売上は、安藤忠雄氏の東日本大震災遺児育英基金に寄付されました。

また、東京高円寺北子ども園の父兄会では卒園記念に寄付つき蜜ロウソクとして購入していただき、一部を高成田享氏の「東日本大震災子ども未来基金」に寄付させていただきました。また、東京福生のカヌレ専門店ル・カナルの支援ギフトや仙台の小さな店主が集まるチャリティーイベントなどにも一部協賛製造させていただきました。

関われる機会をいただきありがとうございました。心から御礼申し上げます。

環境と共生 持続可能社会の実現！

サステナブルデザイン国際会議

昨年2月、東北芸術工科大学で開催されたサステナブルデザイン国際会議で、ハチ蜜の森キャンドルについて発表の機会をいただきました。

大量生産と大量消費、大量廃棄。それによる地球環境の悪化。サステナブルデザインとは、環境と共生しながら今後何世代にもわたって続けてゆくことのできる社会の実現のことをいうのだそうです。キーノートスピーチをなさったミラノ工科大学のエツィオ教授は「デザインはそのための触媒となる」と話されました。

私の発表は、朝日連峰の大自然のもと営まれる養蜂が、ハチミツ収穫のみならず果樹の花粉交配や蜜ロウソク製造に至ること。そして開業とともに続けてきた「森と人の距離を縮めるため」の「つながりを伝える体験教室」なにより「そのための蜜ロウソク」なことについて発表しました。エツィオ教授が手をたいて賞賛下さいました。

たくさんの蜜ろうキャンドルも展示していただきました。実りある会議にお誘いいただき心から御礼申し上げます。

また、5月には同会議でファシリテータを務められた京都繊維大学久保雅義教授の「京のサステナブルデザイン講義」でもお話させていただきました。ありがとうございました。



<http://www.sustainabledesign.jp/>

ビデオ映像にさせていただきました！

かぼちゃランタンで小人の村づくり

20回目の昨年も、紅葉の下にきれいな小人の村が出現。観賞しながら飲むハチミツたっぷりの熱々かぼちゃミルクも大好評でした。

今回は、地域おこし協力隊で頑張っている佐藤恒平氏がビデオ撮影し、ネット投稿用の朝日町CMに仕立てて下さいました。低い小人の目線で撮影してくれた点灯風景は、私も見た事なかった大変ロマンチックなものでした。20年取り組んだご褒美をもらった気がしました。心から御礼申し上げます。この動画は、ホームページの「お知らせ」で見られます。ぜひご覧下さい。今年は

■2012年11月3日午後1時30分～
大人 2000円 高校生以下 1500円
蜜ロウソクも作ります

ハチ蜜の森スノーランタンづくり

この冬は、県主催のツアーに参加下さった宮城県の皆さんが楽しんで行かれました。被災なさった方もいらして、島の橋が破壊され夫婦が離ればなれだった様子を表したのものや、震災を親子でがんばった再現、亡くなったご主人が空から見えるように作ったハート形など、心にしみる作品に泣かされました。観賞しながら飲むハチミツたっぷりの熱々グリューワインも大好評。ホームページの「お知らせ」で見られます。ぜひご覧下さい。次は

■2013年3月2日(土) 午後1時30分～
大人 2000円 高校生以下 1500円
蜜ロウソクも作ります

ご紹介いただきました

- ・Kappo 仙台闊歩 vol51 森のことば
- ・日経ストアカレンダー 12月
- ・BE-PAL 3月号 冒険道具の店
- ・NHK BS ニッポンの里山
- ・セラピスト 2月号 キャンドルの魅力
- ・共同通信 イラスト体験隊
- ・山形新聞 東北未来絵本キャンペーン

ありがとうございました。

蜜ろう利用術①

床に蜜蝋引きしてみました

冬の間休んでいた工房ショップの営業再開を前に、2階の体験教室と店の床板を久しぶりに蝋引きしました。土足なので、だいぶ白剥げて気になっていたのです。

蜜蝋で蝋引きしておく、水分をはじくので汚れが拭き取りやすいことはもちろん、小さな凹みを直す自己修復力がつくと言われてます。また、自然な色艶もちょうどいいですし、パラフィン蝋のようにツルツル滑らすこともありません。そしてなにより有機溶剤などシックハウス症候群の原因物質を使わなくてよいことが魅力です。

蝋引きは、荏胡麻油等と混ぜてペースト状にして塗るのが一般的ですが、私はせっかくなので100%蜜ろうを染み込ませています。

私の方法は、少し荒々しいです。まずバーナーで焦げないように板を温めます。蜜ろうをクレヨンのようにこすり付け、もう一度火を当て溶かしながら雑巾で拭きあげています。今回は、和形ロウソクをかんな削りした時に出た粉の蜜蝋を使ってみました。思いがけずとても使いやすく重宝しました。

工房は床板のみならず、ニスの剥げた作業台や椅子、棚にもろう引きしています。今年こそ外の板壁も塗ってみようと思っています。

さて、たっぷり蜜ろうが染み込んだ床板は、木目も浮き立って見え、とてもきれいになりました。おかげで、土足で入るのをためらうお客様が何人もいらっしゃいました。



アンドリュー蜂日記②

オオハキリバチその後



前号で、灯芯の糸巻きの芯（パイプ）がオオハキリバチの巣になった話を書きました。そして、以前に見たことのある、たくさんのオオハキリバチが乱舞する風景を期待しましたが、残念ながら確認はできませんでした。

ただ、オオハンゴンソウの咲く頃に面白い行動を見ることができました。数匹の蜂がホバーリングをしたり、巣穴の上をウロウロしているのです。きっとオス蜂です。結婚シーズンが始まったようです。しばらくすぐそばでじっくり観察しました。

ウロウロしていた蜂が、時々穴に顔をつっこんでいました。その姿は「おーい、まだですか?」と言っているようでした。スズメバチやマメコバチもそうですが、オス蜂は早めに生まれて他の巣に行きメスが出てくるのを待つのです。それにしても、他の蜂はホバーリングして待っているのに、その一匹だけは図々しいようです。

そしてついにメス蜂が出てきました。するとその瞬間、そのオスはすぐにメスを驚づかみにし、地面に転がり落ちました。ゴロゴロと取っ組み合いが始まりました。そして背中からしっかり抱え込み、さらにあの大きな牙でメスの頭をはさみつけ、さーっとどこかへ飛び去ってしまいました。まさに拉致です。なんという乱暴者なのでしょう。人間だったら警察沙汰です（笑）。

こうして空になった巣穴には、交尾を終えたメス蜂達により、またたくさんの卵が産みつけられたようです。今年の夏も楽しみでなりません。ご覧になりたい方はぜひオオハンゴンソウの咲く頃にお訪ね下さい。

東日本大震災と養蜂

昨年4月。津波被害のあった宮城県亶理町の農家で、がれき撤去のボランティアに参加した時のこと。グニャグニャにへし曲げられたイチゴハウスの残骸の中に一枚のミツバチの巣板を見つけました。改めて、人のみならず、人を支えていた尊い命の犠牲もあったことに気づかされました。

あとで知ったのですが、隣町の山元町も含め、このあたりは東北最大のイチゴ生産地だったのです。ミツバチは花粉交配のためにその一生を捧げているのです。宮城県の河北新報に、両町のイチゴ栽培農家380戸のうち、なんと356戸が被害を受け、96ヘクタールのイチゴ農地のうち90ヘクタール以上が津波で流された、という記事を見つけました。

本格的な収穫期前とはいえ、加温ハウスではたくさんのミツバチが働いていたようです。

私たちは、ヘドロ撤去が主な仕事でした。7人がかりで床下に腹這いで潜り込み、半乾きの真っ黒なヘドロを夕方までかかって取り除きました。しかし、塩分や有害物質を含んだこのヘドロは床下だけではないのです。庭も畑も田んぼも、あたり一面覆われているのです。まるで、長年人間が海に流して来た汚れ物を、海が「こんなものいらない」と、人間界へはじき返してきたかのようでした。

その農家のご主人は、「再開はとても難しい。トラックの運転手でもするつもりだ」と落胆なさっていました。私達は返す言葉もありませんでした。別れ際「再開された暁にはイチゴ食べ放題をお願いしますね」と明るく声をかけるとニコッと笑って下さいました。

亶理・山元のイチゴ園が再興すること。そしてミツバチがまた元気に活躍する日がくる事を心から祈っています。

さて、クリスマスが近い12月のハチ蜜の森キャンドルは、例年インターネットからの注文が相次ぎ、製造が最も忙しい季節です。



しかし、去年は少々静かでした。お客様は「東北の森の恵み」と題した蜜ロウソクをわざわざパソコンに向かい購入する気にはならなかったのでしょうか。確実とは言えませんが、福島第一原発事故による風評公害は、ハチ蜜の森キャンドルにもやってきたようです。

蜜ろうは、一群から年間でわずか500g程しか収穫できません。私は20年以上前から、地元山形県をはじめ、秋田県、青森県、岩手県北部で収穫された蜜ろうを仕入れています。それは、これら各県の奥山こそが、日本を代表するハチミツの一大生産地だからです。

ハチミツの放射能は、第一原発に近い田村市のハチミツから160Bq/kgのセシウムが検出（非流通）されています。その他は今の所は出ていないようです。しかし去年は、実家のハチミツの注文数も確実に減りました。

文部科学省発表の放射能汚染マップによると、山形県のセシウムの値は、ほとんどが微かな10Bq/m²未満、高くても10~30Bq/m²がポツポツ見られる程度となっています。蔵王、吾妻、飯豊、朝日と、ぐるり高い山で囲まれ閉鎖的な地形が幸いしたようです。驚く事に全国の放射能濃度（自然放射線も含む）を比較すれば、山形は全国でも低い値となっているのです。EUは昨年7月、輸入食品の放射能検査対象から山形県を除外しています。

もちろん、蜜ろうを仕入れている他三県の山々も同じような値となっています。東北のハチ蜜の森は、汚染されずに済んでいます。風評公害が払拭され、今年は忙しい12月が戻る事を心から祈っています。

※1月にサイト「情報屋台」に書いたものです。

ハチ蜜の森料理店③③ 苺ミルク



実家の採蜜の手伝いで忙しくなる前に、宮城県山元町でイチゴ農家のビニールハウス設置を手伝ってきました。土を平らにならしたり、50メートルものビニールを屋根にかける仕事でした。

嬉しいことに、休み時間のたびに山盛りイチゴをいただきました。おそらくあんなに食べたのは人生で初めてです。甘くてジュシーで、本当においしかったです。

イチゴは酸っぱいイメージがあって、大人になってからは好んで食べた事ありませんでした。子どもの頃、練乳は贅沢だったので、仕方なくハチミツをかけていました。2、3個食べると残りをスプーンでつぶして牛乳を入れてイチゴミルクにしました。イチゴはそうやって食べるのが一番好きでした。

ところで、イチゴをいただきながら嬉しい話を聞きました。このイチゴは、プランター栽培ではなく直接土耕栽培で実ったものだったのです。昨年4月に、隣の亘理町のイチゴ農家に手伝いに行った時には「塩分を含んだ土では栽培は無理」と絶望視なさっていたので、てっきり新しい土を使ったプランター栽培だと思っていたのです。なにしろ、隣接するご自宅は1階部分がずいぶん破壊されていました。直後のヘドロの風景は容易に想像できたのです。

ちなみに、栽培に至るにはドラマがあったそうです。津波で流れ着いたものか、畑から一本のかぼちゃの苗が育ち、実り、おいしく食べることができたので、「もしかしたら」とイチゴを栽培してみたが無事に実ったとのこと。雨水が土の塩分を洗ってくれたのだらうと話されていました。

まだまだご苦労はあると思いますが、未来はちょっと明るいようです。本当に良かったです。

ハチ蜜の森文庫⑭



- 贈りもの物語
重延浩著 宝島社

20年程前に人気番組の「遠くへ行きたい」で取材して下さったテレビマンユニオンの重延浩さん（現会長）は、その夏、ご自身の手紙を添えてハチミツと蜜ロウソクのセットをお歳暮に使って下さいました。重延さんは取材先で見つけた逸品をそうして30年近く贈り続けてこられました。この度、当時の手紙文を元にその集大成が発刊されました。とても光栄です。ありがとうございました。

後記

双子キャンドルプロジェクト。阪神淡路の時と違って身边が忙しくなった私は「できるだろうか」正直迷っていました。

すると協力を続けて来た神戸1.17のつどい実行委員長の故中島正義さんの奥様から私達に「何にでも使って下さい」と義援金が届きました。背中を押されたように思い、仲間と話し合い資金とさせていただきます活動は始まりました。新しい仲間も加わりました。キャンドル作りの指導者も全国各地で手を上げて下さいました。17年前に阪神淡路で受取り先を探して下さいました伊丹市の森信子さんは「今度は私達の番」と方々に呼びかけ大勢の皆さんで取り組んで下さいました。あたたかな寄付も集まりました。製作会や受取り家族の募集情報については、マスコミの皆さん、社協や復興支援活動関係の皆さんに何度も呼びかけていただきました。心から、心からありがとうございました。

通信ご購読について

- ・ 定期購読を希望される方は、400円分の80円切手をお送り下さい。（およそ5年分）
- ・ 購読期限は、お送りした時の封筒の住所下に、たとえば24-34と号数を明記しています。